ま　え　が　き

本書は，当研究所において平成6年度から平成7年度まで実質2年間にわたって実施された「イランにおける中央・地方関係の展開」研究会および「イランの中央権力と地域経済圏」研究会（研究会の構成メンバーは2年間を通じて同じであった）の成果の報告である。

テーマからもおわかりのように，研究会が目的としたのは，国家統合の核であり政策決定の中枢でもある中央と，固有の組織や文化伝統をもつ地方あるいは地域との関係を分析することを通して，現代イランの構造をつかむ方法上の手だてを得ることである。研究会ではこれまで地方の構造なり論理があまり重視されていなかったという反省のうえに，風土や文化社会の多様性の認識と，多様性をもつ地方と国家の葛藤を捉えようということをコンセンサスとした。例えば言語分布でいえば地方には国語とは別に固有の言語のバイリンガルの世界が広がり，地方には地誌の出版の伝統があり地方社会が成立してきた。また，遊牧民と農耕民が棲み分け，固有の空間を作っている。総じてイランは地方性豊かな国であり，この地方の構造をまず把握しそのうえで国家との関係を明らかにすること，この問題設定が研究に際して共通にとられた。

研究会は，歴史学，言語学，政治学，社会経済史，地理学など異なる専門領域のメンバーで構成され，個々の領域から共通テーマに接近した。研究の成果は逐次研究会で報告され，検討を通してメンバーに共有，蓄積されて研究に生かされた。また，イランとの対比でエジプトを採り上げた。従来，イランは自然が複雑でモザイク的な異質性の強い国であり，これに対してエジプトはナイル川の恵みを受け沙漠の中に帯状に延びた一つのオアシスにたとえられる同質性の強い地域といわれてきた。この対比が有効であるかどうかが検討された。

対象が多岐にわたるために本書の構成が統一性に欠けるという印象を与えるかもしれない。しかし，全体として意図したことは共通するテーマに対する多角的な接近であり，編者はこうした共同研究が地域研究において不可欠と考えている。この点をご理解いただきたいとおもう。

なお，研究会の成果としては，ほかに，初年度の報告書である『イランの中央と地方—研究動向・資料紹介・文献目録—』（アジア経済研究所所内資料・地域研究部No. 6－6，1995年）がすでに刊行されており，また八尾師誠編『イラン「地方史誌」目録』（仮題，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，Studia Culturae Islamicae No.61, Iranian Studies 12）が近く刊行の予定である。

研究会実施期間中の2年間に，主にヒヤリングなどのかたちで外部の研究者に協力を仰いだ。また，平成6年に実施した当研究会からの現地調査の折には多数のイラン人の方にお世話になった。いちいちお名前を挙げることは差し控えるが，これらの方々に衷心よりお礼申し上げたい。

1997年2月

編　　者